しあわせ

7　月　号

十方の无量の菩薩衆
徳本うへんためにとて
恭敬をいたし歌嘆す
みなひと婆伽婆を帰命せよ

（『浄土和讃』三四）

十方世界の無量の菩薩がたは、あらゆる功徳の根本をいただくため、阿弥陀さまにお敬いをささげ、歌をもって讃えられています。みな人ともに、世に尊きかたを仰ぎたてまつりましょう。（意訳）

「手を合わす母」

本来なら今月は東京オリンピックの開幕だったが、一昨年の榎川氾濫をはじめとする日本中に災禍をもたらした自然災害どころではない強烈なパンチを新型コロナウイルスからくらってしまって一年延期となった。

新型コロナウイルスによるパニックは世界中を席巻し、あっけなく一年引き延ばされた平和の祭典、オリンピック。

人間にとってのビッグイベントも新型コロナウイルスには何の関係もないとばかりに猛威を振るわれ、いとも簡単に引き延ばされた。

我が物顔に地球を破壊し続ける人間に自然が立ちはだかっているのだろうか。

新型コロナウイルスに打ち勝っても、また次々と新たな戦いが人間に覆いかぶさってくるのだろう。

そんな戦いを続けながら、人間はどこを目指して突き進んでいるのだろう。目標のない旅路をただいたずらに奔走しているだけなのだろうか。

法座案内

盆会法要

八月　七日　昼席・夜席
　　八日　昼席

講師　海谷真之師（江田島市光源寺住職）

法味の会　ーご和讃の味わいー

七月十日　午前十時～
お話　自坊住職

※本堂内は二四時間換気をしておりますが、お参りの際はマスク着用をお願い致します。

府中町山田二丁目二十五十三
栢原山　龍仙寺
電話（〇八二）二八二ー四八二三

【ご和讃をよむ㉖】～世に尊きかた～

前回のご和讃では、十方の無数の菩薩がたが浄土に往生されていると讃えられていましたが、今回の一首では、その菩薩がたが「徳本うへんため」に阿弥陀さまにお敬いを捧げておられると和讃されています。「徳本」とはあらゆる功徳の根本であり、阿弥陀さまのお名号を指します。阿弥陀さまはその大悲の名のりをもって、あらゆるいのちに絶対の尊厳を与えてくださいます。だからこそ無数の菩薩は、あらゆる功徳の根本として、阿弥陀さまにお敬いを捧げられているのですね。

そして親鸞さまは、無数の菩薩のお敬いをうける阿弥陀さまを「婆伽婆」と仰がれました。「婆伽婆」とは梵語バガヴァットの音写であり、世に尊きかたという意味で「世尊」とも訳されます。無数の菩薩のお敬いをうけているかた、私たちが生と死を貫いて仰ぐべきかた、それが阿弥陀さまなのですね。

先月のことです。七回忌を迎えた恩師の本を一から読み直そうと思い、本棚から引き出して表紙をひらいたところ、こうありました。

このささやかな書を
いまは浄土にいます
父　北清吉　と
母　北つゆ　とに
捧ぐ

膨大な研究に裏付けられた五百頁をこえる大著ですから決して「ささやかな書」ではありませんが、ふと「いまは浄土にいます…」という言葉に目がとまりました。「いまは亡き…」ではない、そこに、いのちを見つめる決定的なまなざしの違いを感じました。

恩師はご生涯をかけて、仏さまのまなざしを仰いで生きぬかれた方でした。自分にどう見えているかではなく、仏さまはどう見てくださっているか、仏さまはどう仰っているのかを、何よりも大事にされた方でした。

「みなさんがた、お仏壇の前で手をあわせるとき、わたしの前に仏さまが立っておられるんと違いますよ。仏さまが立ちあがっておられる前に、手を合わさせていただくんですな。同じようですけど、ぜんぜん違いまっせ。」

いまも恩師の声が聞こえます。仏さまを向こうに眺めて生きるのか、仏さまに見つめられている身を生きるのか。いのちの光景はまったく変わります。わたしの眼では、どう考えても、むなしく亡くなっていくいのちとしか見えません。しかし大事なことは、仏さまはそうは仰っていない、ということなのですね。

仏さまは、たった一つの条件も付けず、立ち上がってくださっています。「まかせよ救う、わが国に生れんとおもえ…」と。「いまは浄土にいます」という恩師の言葉は、まさしく仏さまのまなざしに貫かれていました。

先日おふろのなかで、「死ぬのこわい…」と娘が言いました。5歳になり、生と死を少しずつ、感じはじめているようです。

「そうだね、みんな死んでいかなきゃならないね。でもね、おとうさんも、なっちゃんも、亡くなっていくんじゃないんだよ。まんまんちゃんにならしてもらうんだよ」

すると娘は、真剣な表情で聞いてきました。

「どうしたらまんまんちゃんになれるん?」

「そうだねえ…。じゃあ境内にいるオタマジャクシは、大きくなったら何になるん?」

「うーん・・カエルになる」

「じゃあネコの赤ちゃんは?」…「ネコ」。

「じゃあイヌの赤ちゃんは?」…「イヌ」。

「そうそう。おとうさんも、なっちゃんも、まんまんちゃんの子じゃろう? じゃけえ、まんまんちゃんになるんよ」

娘はただしずかに、うなづいていました。

ともに、仰がせていただきましょう。世に尊きかた、仏さまのまなざしのなかに、いのちの意味をうなづかせていただきましょう。